

カラスコ教授、 サリヴァン教授への応答

金井新二

KANAI Shinji

日本宗教学会が久々に行うこのシンポジウムに、アメリカから著名な3人の先生方をお迎えできましたことを大変喜んでいる者の一人であります。

このシンポジウムで私に与えられた役割は、カラスコ教授とサリヴァン教授の発題について応答的なコメントをすることです。両教授のお示しになった内容は大変に興味ぶかいものです。もうご存知のとおり、カラスコ先生もサリヴァン先生もアメリカでのエリアーデの流れをくむ宗教学の代表者と言っても良い方々でありますから、今回は、お二人が発展させつつある宗教学のことをいろいろ伺う好い機会ではないかと思えます。ただその前に、もう少し一般的なテーマについても伺ってみたいと思えます。

ではさっそく内容に入りたいと思えますが、まず一般的なテーマとしては、宗教的文化的な多元性にどう対応するかという問題が挙げられます。カラスコ教授は最初に、現在のアメリカの大都市における宗教的文化的な多元状況について述べられました。私はそれを読んで、そういう状況であることはいろいろと聞いてはありましたが、改めて強い印象を受けました。カラスコ教授の文章からは、宗教的また文化的な多様性、多元性の状況からのインパクトが良く伝わってきます。そしてそのような現代アメリカの社会から発生してくるトレンドとして教授は新たなアルケーへの探究をあげられたわけです。これについてはまた後で取り上げますが、ここでは、多元状況がこの根源的探求へとわれわれを向かわせるということをもまず確認しておきましょう。

ところで宗教的多元性が宗教対話へと向かわせるという現象は、もう長らく、私たちは体験しています。この問題では良く知られているジョン・ヒックの排他主義、包括主義、多元主義という分類がありますが、しかしまた、多元主義者であるヒックの考えがじつはさらに上の段階の一元主義なのではないかというように、多元性を所与の事実として肯定し受け止めてから、その後が問題なようです。その後が難しいのです。いまここで問題としているアメリカ社会の多元性においても、それをどうリードして行くかと構えるならば それはやはり必要になるのですが 同じ問題が生じるでしょう。その場合、アルケーへの勧めはヒックと同様、何らかの一元性の追求と見なされるべきなのではないでしょうか。

さて、日本でも宗教的多元性とか多元状況ということはしばしばいわれてきました。それどころか、日本をもっとも強く特徴づけるものは宗教的な多元状況である、とすら言われてきました。したがって、当然浮かぶ問題は、アメリカと日本の宗教的多元状況の相違という問題です。これについては、私よりもずっと論じるのにふさわしい方々がここに沢山おられるのですが、一つだけごく常識的なことで申し上げますと、現代のアメリカ社会はもしかすると歴史上初めて、このような本当の多元性というものに直面しているのではないかという素朴な印象があります。これもよく言われることですが、一神教であるキリスト教やイスラム教の社会では強い一元性が支配するので、歴史をみると他の弱小な宗教は排除されてきたように思います。それが今や多く

の他文化からの移民を受け入れて、もはや排除するどころではない時代になって、いやおうなしに多元性を受け入れねばならなくなっている。あるいは受け入れようとしている。私は、その場合にどのような実際的な問題とか困難が生じてくるのかということをもっとお聞きしてみたく思います。多元性というものは条件次第で良い結果も悪い結果も生み出しうるでしょう。多元状況は人々を大いに活性化させるでしょうが、あまり有難くない活性化もある。価値の多元状況がもたらす緊張とか相克とかいうものも当然あるわけです。またこんどは日本の方ですが、こちらはアメリカとは実に対照的に、長い間民族的な一元性の上に宗教的な多元性が育まれてきました。この対比はかなり面白そうだと感じます。またカラスコ先生は習合を超えるということをおられますが、日本が世界に誇るものももしかするとその習合である、ということも興味ぶかいことです。

また、私は、カラスコ先生とサリヴァン先生がお二人とも、大変に現実社会の問題にたいして積極的な姿勢を持っておられることに強く印象づけられました。カラスコ先生のアルケーの探求はどれも実践的な課題と密接に結びついております。つまり、自然環境と人間(環境破壊)、植民地主義(帝国主義)の克服、都市文化の創造性であります。また、サリヴァン先生が紹介して下さったハーヴァード大学の世界宗教研究センターのプロジェクトは、さらに具体化されたレベルで、「今日の世界の差し迫った現実問題にたいして積極的な影響を与える」努力がなされているわけです。環境問題が取

り生まれ、世界諸文化や諸民族の相互理解のための宗教博物館や世界文化フォーラムがすでに発進しております。これについて、私はもっといろいろとサリヴァン先生に詳しくお聞きしたいことがあるのですが(実は、昨年の夏に、そのために先生のところに出かけようとして計画したのですが、大学の研究休暇の形が急に変わったために行くことが出来ませんでした)、今回は時間がありませんのでまたの機会にと考えております。このようなお二人の内容から、私が宗教学者の社会的責任というテーマを引き出したとしても、決して的はずれではないでしょう。そしてこのテーマは、日本では、ご存知のようにあの悲惨な事件(オウム真理教事件)以来、宗教学者にとっては緊急のものなのです。というわけで、許されるならば、ここで、多元社会の諸問題と、それに直面しての私たち宗教学者の社会的責任のありかたをめぐって意見の交換ができれば大変有益ではないでしょうか。

では、第二の宗教学プロパーのテーマに移ります。これは最初に申しましたように、エリアーデの衣鉢を継ぐ両先生の宗教学についてということですが、とくに今回は経験科学との対話可能性という点をからめて伺いたいのです(大変要求が多くて申し訳ありません)。

そこではじめにごく短く、私のもっております状況認識や問題意識のようなことをお話しておきたいのですが、それは、現在のアメリカの学問状況にも大いに関連しております。まず、それから先に申しますと、最近、アメリカで宗教現象学と経験科学のかなり突っ込んだ論争が2つありまし

た。1つは還元主義をめぐって、他の1つは比較という方法についてです。そしてどちらの場合も現象学の主観主義的な性格にたいして経験科学的立場から疑問が出されました。これにたいして、現象学はひとつの必然的な学問的立場なのだと言った現象学者は主張し、また、経験科学は概して宗教的なものへの理解において欠けがちであると反論したのであります。その議論の中でやはりたびたびエリアーデが引き合いに出されました。ことに還元主義論争では、最終的にはエリアーデが焦点でした。こうして、現在のアメリカでこのような論議が盛んであることは、それ自体、歓迎すべきことだと思います。さらにこのような論争状況は日本宗教学会が参加している IAHR にもあてはまります。もっともここでは、私の知るかぎり、学問的討論よりむしろ政治的対抗関係が進行しているように思われます。このような対立は人間の集団にはつきものだと言えるでしょうし、対立そのものが悪いとは言えないでしょう。ただそうした対立がより学問的な対論として公開の場にもたらされることが望ましいと思います。私は、宗教現象学も経験科学的宗教研究もどちらも宗教学の必要不可欠な大きな枝であって、したがって、両者が生産的な交流や対話をなすかどうかということは、決して大袈裟ではなく、宗教学の将来を左右すると思っております。また、このような問題状況のなかで、私自身は及ばずながら現象学を担ってゆきたいと考えております。

さて、もういちど、カラスコ先生のアルケーにもどりますが、これについては、まず、アルケーそのものが問題となるでしょ

う。アルケーとは一体何なのでしょう。カラスコ先生はそれを「オリジナルの形」といいうような「意味とシンボルの諸秩序」と説明しておられます。私はこれを「よりベーシックでラディカルな存在性への開眼」とか「より大きな人間性への回帰」として理解しても良いのではないかと考えております。無論この「回帰」というのは時間的には過去ではなくむしろ未来を意味するでしょう。先には一種の一元性の追求といいましたが、むしろこれは一種のユートピアニズムではないのでしょうか(この言葉のほうを私は好みます)。またサリヴァン教授の言われる「神話的、美的な想像力」の刷新ということも、同様に、より深い人間の能力の開発とか、その再発見ということでありましょう。ですからそれもまたアルケーの実質的内容の一つであるといえるでしょう。そして、このようなお二人の主張には、改めていうまでもなくエリアーデの「創造的解釈学」の根本的精神が強く反映しているように思われます。エリアーデの語ったアルカイックなもの、近・現代人が忘却しがちな古代的神話的なものの復権、それによって現代や未来社会をかたち作ろうという強い情熱。エリアーデが一つの代表的な現代文明への批判であったとするなら、カラスコ教授とサリヴァン教授もまたそうである、と言えるのではないのでしょうか。

そこでお伺いしたいことは、次のようなことです。両先生が見ておられる多元的な現代社会というもの、つまり現代アメリカ社会でよろしいのですが、それはいろいろと問題にみちている、それにたいしてお二

人は「アルケーの探究」や「神話的かつ美的な想像力の刷新」をいわば根本的な処方箋として出されたわけです。その場合、もう一步立ち入って伺いたいのは、その処方箋は一種の劇薬を処方していると思われがちだということについてです。そこには無論、現象学にたいする無理解があると思われれますが、いいかえますと、宗教現象学はもしかしたら宗教になりかわって救済を処方したいのではないが、いや、実際しているのではないかというのです。この疑念は、先のアメリカでの論争において経験科学の人々が現象学について抱いていたものです。現象学は実は姿を変えた神学ではないのかとかれらが言うときの、きわめて根深い疑いです。私は、それは根本的な誤解であると考えています。しかし、すでに(IAHRの歴史で言えば)1960年代から繰り返し出され、現在でも燻っているこの疑念にたいしては、やはり誠実に答えねばならないと思います。そうでなければ、対話を前進させることは出来ないと思っています。ここで私はマックス・ウェーバーのことを想起するのですが、かれは学問は宗教や芸術とちがって人間の全体的意味や救済を与えることはできないし、また与えようとしてはならない。そうしないことによって始めて、学問としての信頼をかちうることになるのだということを、当時のドイツのニューエイジャーたちにたいして、しかも彼らに招かれた講演会で、力をこめて述べたのでした(「職業としての学問」)。これについては、現象学者をふくめて、大学で教えている研究者は基本的に同意すると思います。そうであればやはり宗教現象学は宗教では

なく、救済を提供しないのです。しかしそれにかんして何かかなり重要なことを、おそらく現象学者にしか言えないようなことを、やはり言うのではないかと思います。ではそれは何か、ということです。

これに接続しますが、次に、この処方箋は経験科学の出す処方箋と かれらも無論処方箋を出すのです どのように補い合えるのか。協力できるのか。その相互の役割分担といいますか、その確認についてはいかがでしょうか。カラスコ先生は植民地主義や都市の問題を語られました。そのようなテーマは政治学や社会学のオハコなのですが、宗教現象学がそこに切り込んでゆくならば、政治学や社会学ができない貢

献ができるに違いありません。おそらく同じテーマを扱っても、現象学が切り開くのは政治学や社会学とは違うレベルであると思います。この点はいかがでしょう。またサリヴァン先生がリーダーとして推進しておられるあのプログラムの数々は、すべて、さまざまな学問的立場の人々の対話と協力そのものでありましょう。とすると、現象学と経験科学の対話というこのテーマについて、先生は他の誰よりも説得的に語れる立場におられるのではないかと思います。

以上、自分の関心に引き付けたはなはだ勝手なコメントになりましたが、お許しを頂きたく思います。